

## 第63回 日本新生児成育医学会・学術集会

与田 仁志 東邦大学医学部新生児学講座主任教授／東邦大学医療センター大森病院総合周産期母子医療センター長

2018年11月22日(木)～24日(土) 都市センターホテル／海運クラブ

第63回日本新生児成育医学会・学術集会を2018年11月22日(木)～24日(土)の3日間、千代田区の都市センターホテルおよび海運クラブにて開催しました。同時開催として、第28回日本新生児看護学会学術集会も東邦大学主催で加茂あゆみ師長を会長とし、同じく海運クラブとシェーンバッハ・サボー(砂防会館)にて執り行いました。参加者も新生児成育医学会で1,350名、看護学会で1,500名を超える盛大な学術集会となりました。

本会の名称は第60回学術集会以降、一般社団法人化を契機に日本未熟児新生児学会から日本新生児成育医学会に変更されました。英語名は、Japan Society for Neonatal Health and Development(JSNHD)です。

日本小児科学会の分科会としては一番歴史が古く、会員数も約3,000名と最大規模の分科会です。

東邦大学の主催は1991年の多田裕教授以来27年ぶりとなります。また私の前任地、日本赤十字社医療センターの赤松洋先生が1988年に日本未熟児新生児学会を開催され、30年の時を経て今度は平成を締めくくるこの年に、名称も新たに日本新生児成育医学会を開催できましたことは何かの縁を感じました。

本会のテーマは「いのちをつなぐ、こころをつなぐ～新生児を巡る過去と未来～」でした。わが国の新生児医療を過去から学び、未来を見据えるための学会にできればとの思いです。周産期医療においてわが国はトップレベルの救命率を維持し、「後遺症なき生存」を合言葉に、先輩たちが築いた日本の新生児医療を質的にも発展させてきました。そこには周産期に携わる医療者の献身的な努力がありましたが、今一度診療体制を振り返る時代にもなっています。

会長講演では「新生児科医がおこなう胎児超音波診断」で、新生児科医が胎児超音波検査に参画することは母児へのprenatal visitにつながるという、東邦大学で実践してきた「胎児超音波外来」の内容を紹介しました。

特別講演では、ジャイアントパンダ「シャンシャン」のお話を恩賜上野動物園副園長の渡部浩文先生に行ってくださいました。獣医師の視点から早産児で出生するジャイアントパンダの生物学的な話は、われわれ医療者にも共感できる大変貴重な講演でした。海外招待講演は「impact of fetal echocardiography on neonatal services」と題し、英国のGurleen K Sharland先生による新生児科医のための胎児心臓病診断の重要性の話を、「sound touch and the infant brain : what you sense is how you grow」のテーマで米国のNathalie L Maitre先生によるdevelopmental careの魅力あふれる講演を行っていただきました。その他、日韓台3ヶ国合同を記念して、

学会ポスター